
人間と人形と幻想郷

黒猫ひろき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

人間と人形と幻想郷

【Nコード】

N3183T

【作者名】

黒猫ひろき

【あらすじ】

幻想郷、人々から忘れ去られた物、信じられなくなったものが集うその場所に一人の青年がやってきた。
金髪の少女、アリス・マーガトロイドは自分の家の前で倒れているそれを…。

東方projectの二次創作です。

キャラのイメージを壊す恐れがあるかもしれません。
オリキャラが登場します。注意してください。

其の壱「金髪の少女と出会う」(前書き)

東方projectの二次創作小説です。
オリキャラが出ています。

東方好きの人以外は注意してください。

其の壱「金髪の少女と出会う」

人間と人形と幻想郷

其ノ壱「金髪の少女に出会う。」

「今日は豊作ね。」

金髪で白い肌のある少女が、草やキノコを抱えて薄明るい森の中を一人歩いている。

彼女の眼と鼻の先には西洋の建築様式が見られる家があり、彼女はその周辺で足を止めた。

「とりあえず、ここに置いておきましょう…。早く家で休みたいわ。」

家の周辺にある切り株の上に先ほど持っていた物を置き、家のドアへと歩み寄った其の時、彼女はまるで殺人現場を見たかのように目を丸くした。

目の前に人間が一人倒れているのである。

「…見られない人だわ。人里の子かしら…？ 取り敢えず、このままここで寝ていては風邪を引くし…私のベッドに寝かせましょう」
彼女は目の前に倒れているそれを抱きかかえて、家の中へと入って行く。

そして、ベッドにそれを寝かせて彼女自身はその隣でその目覚めを待ちながら、もくもくと読書が始める。

そうして時間が流れていく。

数時間が立つと、彼女は大きく伸びをしてため息をついた。

その時、目の前のそれが小さいうめき声をあげた。

「あら、お目覚めかしら？」

それは目を覚まし、むくりと顔を上げてから左右を見回し一言。

「ここは…？」

こういうシチュエーションではお決まりのセリフである。

「私の家よ。」

「あなたは…？」

「ああ、そうね。まず名前を言うのが先だったわ。暫く人とは関わっていないかったから、つい忘れてた…。私の名前はアリス・マーガトロイド、魔法使いよ。」

彼女は凜とした表情で自己紹介を早口で済ませる。

だが、目の前のそれはなにやら訝しげな表情で彼女を見る。

「魔法使い…？ ギャグですか？ この世界に魔法使いなんているわけがないじゃないですか。それにアリス・マーガトロイドって…。僕は日本に居るはずなんですけどね。」

今度は彼女…アリスが訝しげな表情で彼を見る。

そして数秒後、何かを悟った様子でうんうんと頷いている。

「まあ…一旦外に出ましようか。そうすればあなたが置かれている状況の数十分の一くらいは分かると思うわ。」

アリスはそう言って人間を外へと導いていく。

人間の手を取り、玄関に手をかけた。

そして、ドアノブを捻って扉を開ける。

少年の目に、鮮やかな緑が飛び込んできた。

日差しを斜めから受け、神々しく輝く木々達。

「…綺麗。」

「そうでしょう？。ここはね、魔法の森という所なの。あなたの知っている世界にこんな森はある？ 貴女の知っている街にこんな

変な名前の森はあるかしら？」

「ありません…。でも、どういうことですか？ 違う世界に来た
とでもいいたいんですか？」

「まあーね。まあ、確信は無いけれど…。」

「そうですかー…。」

人間は何やら腑に落ちないのか、眉間にしわを寄せている。

アリスは少し俯いて、そしてハツとした顔で人間を凝視した。

「ねえ、あなたさえよければだけどこういうことに詳しい人が知
り合っているの。一緒に来てくれないかしら？」

「…いいですよ。僕もこのままじゃあ何がなにやらわからないの
で。」

アリスはホツと胸を撫で下ろす。

「そういえばあなたの名前…まだ聞いてなかったわね。」

アリスが思い出したように言うと、エンドレスしかめっ面状態だ
った人間が普通の顔でアリスの方を向いて自己紹介をする。

「あ…えと、鈴木 臨です。18歳で、人形職人をしています。

高校3年生、卒業間近なのにこんなことになって驚いているところ
です…。と、こんな感じでいいですか？」

アリスはため息を一つついて

「それでいいわ…。それにしても、模範の様な自己紹介ね。何
かテンプレートでもあるのかしら？」

「いつもこういう感じなんです。名前と、年齢と職業と、今の心
境を言う。そう決めているんですよ。」

「そう。」

アリスは玄関へと顔を向けて言う。

そして暗がりへと消えていった。

人間もアリスの後に続いて家に入っていた。

其の式「ああ、幻想郷」

其ノ式「ああ、幻想郷」

僕は改めてこの家を見渡してみた。

通路には棚が設置されており、その棚にはおびただしいほどの人形が所狭しと並べられている。

なんだこれは、なにかのホラーか。

まあ、とにかく人形を見るのに慣れていない人からすればここは居ていられないだろうな。

「アリスさん、さっき話してた人って、どういう人なんですか？
やっぱりオカルト狂信者とか…？」

「んー、どう表現したらいいのかしら。なんというか、とにかくあの人は…そう、鳥のような人よ。」

鳥のように自由で、気さくな人だから。堅くならなくていいのよ。もちろん、私の前でもかしくまる必要性は全くないわ。むしろ私がかしくまってしまうほどだし。」

アリスさんは早口だが、分かりやすく説明してくれた。

この人はなんとというか、冷静で頼りになりそうだ。

取り敢えず、どういう経緯でこの状況になったのだろうか。脳をフル回転させて考えてみよう。

…と思ったのだが、ここ数日の記憶がなにやら曖昧だ。

いやまあ、その前に…過去の事があまり思い出せない。思い出せる

のは人形の作り方、1、2年前の栄光。地元の風景。最低限の知識。それだけだ。

学校や友人のこと、何も覚えていない。

そもそも僕は友人がいたのだろうか。謎だ。

ますますこの状況が不可解だ。意味が分からない。

「えと、鈴木さん…。知り合いの所に行く準備が出来たわ。行きましょう。」

「あ、はい。わかりましたアリスさん。」

「あら、さん付けなんて初めてだわ。なんか新鮮。」

僕は再び外へ出た。そして、森の中を歩きます。

「だって、初対面ですし。それに、アリスさんが僕をさん付けしたから…。」

「あら、気に食わなかったかしら？ 私なりに人間の思考に便乗してみたのだけれど。」

「なんか、自分が人間じゃないみたいな言い方ですね」
半笑い。

「ええ、そうよ。私は人間ではないわ。妖怪でもないけれど…。」

なんとというか、あれよ寿命を延期させたのよ。」

うん、痛い。

ちよつとした電波…いや、中二病というやつか。

でもそれを言えば僕はどうなんだろう。僕も随分と中二的な感じだな。記憶の一部無くしてるしね。

「それにしてもこの森…迷いそうですね。」

話題転換。さっきの話題はちよつとまづかったようなのでね。

「そうねー。でも、慣れたら案外便利横の森。食べ物たくさんあるし、結構この世界の何処へでも行けちゃうわ。」

まあ、そりゃあ何処だって最終的には世界の何処へでも行けちゃうでしょう。飛行機にでも乗ればね。

「そうなんですかあ…。ちなみに、知り合いの所へはどれくらいかかりますか？」

「この森を抜けて、ちょっと山を登ったところよ。」

「登るんですか…？」

「大丈夫よ、そんなに登らないし参道があるから。」

参道…？ 知り合いの所というのは神社かなにかだろうか。

だとすると知り合いって…巫女さん？

なんかテンションが上がるかも…！

…つと、いけないいけない。今日の前に女性が居る状況でそういう事を考えるのはいささか失礼というやつで、駄目なんだ。

「まあ、ここについての説明は大方そんな所んだけど…って、聞いている？」

しまった！ アリスさんの話を全く聞いていなかった…。

「え…ちゃんと聞いてましたよー？ あははは。」

「ほんとかしら？ …まあ、どうせあの巫女にも説明してもらっからいいけど。」

よかった…大事な話をどうでもいい雑念で二度と聞けないかと思っただ…。

「あ、あと少しでつくわよ。」

いつの間には僕らは森をぬけ、山道を歩いていた。

これが参道だろうか、きちんと整備された階段が上の方まで並んでいる。

周りには木々がきれいに生えており、大きな木もいくつも見える。どこか近所の神社に似ている気がしたが、よく覚えてないので口にはしなかった。

「もうすぐ着くわ。この世界の核になっている神社に…。」

「やっとなんですか。」

やばい、かなり疲れてきたぞ。涼しい表情をしていても、実際はものすごく疲れる。

それにしても…僕の横にいるアリスさんは本当に涼しい顔をしているな！

息も整っているし…。

ひよっとして僕が体力ないだけなのか！？

…ぐうう。

あ、鳥居が見えてきた。やった！ ゴールだ！

「着いたわ。早速あの巫女を呼ばないとね。」

「そうですね。」

「霊夢、いるかしら？」

アリスさんがお賽銭箱の前に立って神社の中へ呼びかける。

僕はアリスさんの後ろで直立不動。

「…いないのかしら？。 霊夢？」

アリスさんがため息をついた。

だがその時、奥の方からけだるげな女性の声があった。

「はーいー。いるわよー。まったく、お茶してたのに…。なんの

用？」

「ちよつと急用よ、急いで頂戴。」

「わかったわよー。」

奥の方がなにやらどたばたしている。

おそらく霊夢という巫女さんが慌てて外に出ようとしているのだろう。

その音は次第に近づいてきて、もうそこまで来た。そして、赤いリボンをつけて脇が露出した巫女服を着た人が出てきた。

「まったくもうー、この時間に急用って…あれ？ アリスじゃない。珍しいわね。」

「そうね、滅多にここには来ないもんね。」

「で、急用って？」

あれ？ 僕の存在スル？

「見慣れない人ね」とかないの？ 普通あると思うけど…。

「あら、見慣れない人間ね。拾って来たのかしら？」

おお、その反応だよ！ ていうか、拾って…。あながち間違いでないだろうけど…。

「まあ、そんなところね。あのね霊夢、この子外の世界の子らしいのよ。」

「でしようねー、私は博麗の巫女だから多くの人間や妖怪と接点があるけれど、こんなのは見たことがないもの。」

こんなのとはなんだこんなのとは。物扱いか、僕は。

「それで、この世界のことをこの子に教えてやってほしいのよ。

あと、なんでここに居るのか原因を知りたいし。」

「面倒臭いけど…わかったわ。これも博麗の巫女の仕事だしね。」

それにしてもこの二人…文章にしたら口調が似てるな、うん。実際声を聞いたらわかるけれど。

「えっと、貴方の名前は？」

「ああ、そういえばまだ聞いてなかったわ。」

「何やってんのよあんた、普通最初に聞くでしょうに。」

「えっと…鈴木 臨です。」

「鈴木さんね。それで鈴木さん？ この世界が自分の元居た所とは違うことはもうそのアリスから聞いたかしら？」

「あ、はい。それは聞きました。」

「なら少しだけ話が早いわね。えっとね、この世界は“幻想郷”

というの。人間界から忘れ去られた物、信じられなくなった物などが集まってくる所なの。だから多くの妖怪がいるわ。まあ、この世界についての説明はこんなもんでいいでしょう。」

え、いいのか？ まあ、今で大方分かったと言えば分かったけど。

あ、いや。納得したわけではないぞ、断じて。

だってそんな話信じないのが普通というものであって…。

「で、鈴木さん？ あなたは何故ここにいるのかしらね。んー、外の世界での職業はなんだったのかしら？」

「人形職人です。」

「その年格好で？」

「はい。」

「それで、なにか華々しい時期があったりした？　そしてそれが衰えていったとか。」

その通りだ。

華々しい時期があったのはあった。

「はい…。高校生人形職人として話題になり、テレビにも取り上げられて…有名になりました。一時期だけ、本当に一時期だけでした。」

「それで、衰えていった…と。」

「はい。」

「なるほど、分かったわ。あなたがここに居る理由…。」

早い！　早すぎるだろう！　普通こういう異世界に飛ばされた！とかいうのはすぐに原因が判明しないのが当たり前というものであって、こんな早いのは…。

「貴方がここに居る理由は、ただ純粹に幻想入りしてきたのよ。つまり、正式に幻想としてここ、幻想郷にやってきたの。」

「と、いうと…？」

「この住人になりなさいということよ！」

「ああ…そうですか。つて、ええ！？」

「鈴木さん、喜びなさい。あんたは普通人間では出来ない貴重な体験を出来るのよ！」

いや、喜べと言われてもですな。

僕には外の世界での思い出とかいろいろありますし。それに学校が…！。

まあ、学校なんて行ってなかったけど。

そして一つ重要な問題がある。

「あの…僕何処に住めば？ 家が無いんじゃないあ、住人になるにもなれないですよ。」

「そうねえ…ホームレスっていうわけにはいかないかしら？」

「いやいやいや！ 駄目ですよ、普通に考えて！」

「んー…でもねえ。私の資金では家を建てるなんてそんなこと…」

「無理ね」

言葉を濁らした霊夢さんにアリスが割って入った。

「そうなのよねー。どうしましょうか。」

「…ねえ鈴木さん。」

アリスさんが僕に目を合わせず話しかけてくる。

「はい？」

「よかつたら、私の所に住まないかしら？」

え…？ それはどういう…。女性と一つ屋根の下暮らすという…。ええ！？

「え！？ あ、え！？」

「あ、それいいわね！。鈴木さん、アリスと一緒に住みなさい！ 霊夢さんにビシツと指を指されながら命令され、アリスさんと一緒に暮らすことになってしまった。」

いや、しまったというのには別に嫌というわけじゃなくて、むしろいいんだけど…。

ってなんだこれ。僕は脳内で誰に言い訳しているんだろう。

とにかく…謎で素敵な女性、アリス・マーガトロイドさんとの同棲が始まったのであった。

其の参「弾幕ごっこ?」

其の参「弾幕ごっこ?」

「あ、そうそう! 明日ちょっと教えなきゃいけないことがあるからまた神社に来なさい!」

と先日霊夢さんから言われたので、僕はまた博霊神社にいる。

アリスさんとゆっくりするというのができなかつた。

昨日も結局帰ってご飯を食べたらすぐ寝てしまったからだ。

「で、今日はなんですか?」

僕はそう単刀直入に霊夢さんに尋ねると、霊夢さんはただ一言。

「この幻想郷においての争い事の解決方法について、身を持って学んでほしいのよ。」

身を持って…? どういうことだろう。

「はあ。」

まさか殴り合いの喧嘩!?

外の世界となんら変わらないじゃないか!

「まあ、弾幕ごっこっていうんだけどねー。とりあえず、弾を打ちあつて当たった方が負けみたいな感じよ。スペルカードルルっていうのもあるんだけど、それは後で説明するわね。」

弾を打ちあう? ドツチボーつか何かかな?

それだとしたら僕は得意だ。(よけるのが)

「まあ、習うより慣れるがモットーだから。とりあえず…あたしが打つ弾を避けてみてね。」

え? いきなり?

「アリス、始めの合図よろしく。」

「よい、スタート。」

アリスさんの合図で、霊夢さんは御幣を前に突き出して…本当に、“弾”を打ってきた。

その弾はまるでシューティングゲームの弾幕の様に、狭い隙間を作りながらこちらへと迫ってくる。

「え！？ ちょ！。まじで弾じゃないすか！」

「だって、弾って言ったもん。」

まあ、そりゃあそうだけど！。これはちょっと予想だにしてなかったというか、なんとというか！。

だけでも考えている余裕などないので、迫りくる弾幕を避けることに専念することにする。

わずかな隙間を見つけそこをくぐったり、ジャンプでかわしたりと多種多様なアクションで避けていく。

「いきなりにしてはなかなか避けるわね…。」

まあ…外の世界ではシューティングゲームとかいっぱいやったし…。それに、サバイバルゲームは得意だったからな。

「でもこれはどう？ 霊符『夢想封印』。」

そういつて手を天に掲げ、宣言する。

そして次の瞬間…大きくて様々な色をしたホーミング弾が次々と出てくる。

「パターンが変わった…！？」

おいおい、こんなのありかよ…。避けれるわけがないじゃないか…。んなの。

そして諦めた次の瞬間、僕はホーミング弾に当たっていた。

「終わりね。霊夢の勝ちよ。」

くそ…。少し痛いな。

しっかしこれは、危険な“ごっこ”だな。

「霊夢、スペルカードは使わないんじゃないの？」

「あら？ あたしは説明は後でって言ったけど、使わないなんて一言も言っていないわよ？」

「あらそう。」

「あの、すいません。スペルカードってなんですか？」

さつきからこの人らは僕に分からない単語を次々と…。

「さつきあんたが被弾したような感じのやつよ。まあ、分かりやすく言えば必殺技かしら？ 必ず殺すわけではないけどね。まあ、これはあたしが作ったルールなんだけどね。それぞれ、自分の能力に合わせて弾幕を作るの。それに名前とかをつけて、契約書みたいなのに書いて持っておくのね。この契約書が“スペルカード”なの。」

んー、まだ分からないことがあるな。

「あの…。そもそも、弾幕ってどうやって打つんですか？」

「そんなもん、ガッツよガッツ。気合でうてるわ。」

「はあ。」

「あんたもそのうち打てるようになるわ。まずはこの幻想郷に慣れなさい。」

「あ、あと…。弾幕が打てるようになったらスペルカードも考えておいてねー。」

考えておいてねーと言われても…。

なんだか、肩が重いなあ。

新しいことが多すぎて…。というか驚く事が多すぎて。

「あ、そうそう。あんたの事をちよいと知り合いの新聞に載せて

もらったから。」

「え、ちょ！勝手になにやっつてんすか！」

いきなり口を開いて何を言うかと思えば、そんな人権侵害的なことを…！

こつというのは普通本人の許可が下りてからするものだろう。

「だって、そのほうがあんたが幻想郷に馴染みやすいかなーって、あたしなりに考えたんだけど…。気に食わなかった？」

そう上目で言われると…。

「あ、いえ。そういうことなら、いいです。」

情けないなあと、そう思う。つくづくね。

「あ！それと、今日の晩にアリスと一緒に神社に来なさい。理由は、来たら話すわ。」

「…わかりました。」

「よし、とりあえず今は帰ってよし！」

と、いうことで最後まで約束をつけて甲斐さんした。

これでやっとアリスさんとの…！。

いや、それは…ないか。

其の参「弾幕じっく？」（後書き）

どうも、黒猫ひろきです。

なんか、80%ノリで書いているものなんですが…。
書くことになったなりゆきと、何故アリスを主要キャラに選んだのか
ネタばれにならない程度に話していきますb

えとですね、高校入学してすぐのころ

僕は東方をひろめようt()

同人誌を貸したところ、友達から

「おもしろいな、あんたも書いてみたら？」

と言われたのがきっかけで。

どんなむちゃぶりだよ！><

二次創作なんてやったことねーよ！ と思ったんですが

なんとかやってみてますねw

その所為で5人の勇者様の更新が・・・がががが！！

で、アリスを選んだのはですね。

単に、僕がアリス好きだからです。

簡単な理由ですね^ ^

其の巻でのPVとユニークがすごいことになってました。
ありがとうございます！

よかったらコメントつけてくれると励みになりますっ

長いあとがきまで読んでくれた人、本編だけでも読んでくれた人
ページ開くだけでもしてくれてくれた人
ありがとうございます。

第四幕「個性豊かな幻想郷」

第四幕「個性豊かな幻想郷」

結局、家に帰ってから数時間…

期待したような事は何もなかった。

期待したような事とは、なにもやましいことなんかではない。ただ、アリスさんとゆっくりとするとということである。

「鈴木さん、そろそろ行くわよ?。」

「あ、はい!。」

先刻霊夢さんから言われた通り僕らはまた博霊神社へと向かわなければならぬ。

面倒というわけではないけれど、ちょっと遠いし。景色も見慣れてきたから少しだれる。

というわけで、移動中は無心で。描写とかもなしで。ここには書かないことにしよう。

…というわけで、神社まで来たのだけれど…。なんだか騒がしい、霊夢さんだけではなさそうだ。

他に誰がいるんだろう?

「なんだか騒がしいですね。」

「そうねー。」

なんだろう、アリスさんはどこか遠い目をしている。

「とりあえず奥に入ってみましょう。」

「そうですね。」

奥は明かりが点いており、笑い声まで聞こえてくる。

人を呼びつけておいてあの巫女は何をしているのだろう。

「じゃあ、入りますか…。」

なんだか気が乗らないまま扉に手をかけ、扉を開ける。
そして僕は、神社の中の光景に目を疑った

「お、来た来た！。鈴木さん！。」

霊夢さんが手を振っている。

しかも、あれ？ 一人じゃない。

ていうかいつぱい居る！？。霊夢さんが言っていた幻想郷の住人だろうか？

「そんなところでつつ立ってないで、こっちに来なさいよ。」

僕は霊夢さんに言われるがまま霊夢さんに近づく。

「鈴木さん、えつとね…。内緒で歓迎会なるものを開いてみました！。」

ジャジャンと効果音がなりそう。

というか…歓迎会だって！？ なんか照れくさいじゃないか！。

「ありがとうございます、霊夢さん。」

「礼なんていいのよー、みんなただ暇なだけだから！。」

それでも嬉しいものは嬉しい。

「じゃあ…えつと、ここに居る10人を紹介するわね。」

まあ、この狭い神社だからな。その人数が限界だろう。

実際には、もつともつと多いらしい。

「あたしの隣にいる魔法使いの帽子被って、箒持ってるのは…。」

「霧雨魔理沙だぜ！。」

魔理沙さんは霊夢さんに覆いかぶさるようにして自己紹介した。
なんだか元気一杯な女の子だなー。という第一印象。

「よろしくお願ひします、魔理沙さん。」

「敬語はよしてくれよー。照れくさいじゃないか!。」

「そうよ、こんな奴に敬語なんて使わなくていいのよ…。ていうか、幻想郷住人全員にタメ語使いなさい、あんた。あ、それと呼び捨てね。」

「おいおいこんな奴とはなんだこんな奴とは。」

「わ：わかりました。次から敬語にしますね。」

魔理沙は横で霊夢にぶーぶー言っている。なんだか可愛らしい。

「で、こっちにいるのがあんたと同じ人間の。」

霊夢さんが手で合図する。

「十六夜 咲夜です。紅魔館というところでメイド長をしております。以後、おみしりおきを。」

なんだか、周りの人と違って清楚な感じだ。

この人にだけは何を言われようとさんをつけたくなる。

やっぱり、清楚なのはメイドをしているからかな。

「よろしく、咲夜さん。」

咲夜さんはぺこりと頭を下げる。

いい人そうだ。

「で、その横にいる…。」

「霊夢、それは私に紹介させてちょうだい。」

「別にいいわよ？ あたしも手間が省けるしっ。」

「あらそう…。さて、私の隣に居らっしゃるのは、レミリア・スカレットお嬢様でございます。私のお嬢様というか、私が使えているお方です。なんとというか、すっごく可愛い吸血鬼で…痛っ。」

レミリアが咲夜さんを軽く叩く。

「咲夜、少し黙っててくれない？。 臨、よろしくね。」

「よ…よろしく。」

まあ、なんとというかこの人を前にすると咲夜さんは人が変わるな。ていうかさつきからアリスが空気化してる気が…。

「アリスー、あたしちよっと面倒になってきたから。 後紹介よろしくねー。」

「まかせてちょうだい。」

お、アリスの出番が…！。

「えっと、そこでお酒見つめてる馬鹿っぽくて青い妖精がチルノっていう妖精で、まあ実際馬鹿ね。」

ひどい紹介のされかただな。

チルノ…算数とか出来なさそうな顔してるな。教えてあげたくなるけれど、面倒だ。

「その隣にいるのが射命丸 文って言って、この前霊夢が言っていた新聞記者よ。 種族は烏天狗。 そしてその隣が魂魄 妖夢、種族は半人半霊ね。 なんか中途半端。」

「中途半端っていうな！。 斬るよ！？」

「斬れないものは？」

「あんまりない！」

怒った割にはなんかノリノリだぞこの人！。

えっと、文に妖夢。 おーけい。 覚えやすくて助かる。

「で、こっちが東風谷 早苗、現人神よ。 矢守神社ってところに居るわ。 そしてそっちが鈴仙・優曇華院・イナバ、兔ね。 座薬を打ってくるわ。 そして狂気の赤い目を持っているから注意ね。」

「別に注意しなくてもいいけどねー。 って、座薬じゃない！。 これはミサイル！。 ミ・サ・イ・ル！。」

うやみみ…、かわいい…。

じゃなくて…ミサイル打てるのかー、なんか凄いな。やっぱりあれか、弾幕ってやつなのか。

「で、あとの二人は」。八雲 藍と、雲居 一輪よ。これで、ここに居る人の説明は終わり。あとはゆっくりしてて頂戴。」

「ちよつと、主に私が紹介したのにしめだけ取って行くのね、貴方って人は…。」

全くもってその通りである。

アリスの方が紹介した人数多いぞ！。

喋ってる回数は霊夢のほうが上だけでも！。

そして、ゆっくりしろと言われても。アリスさんと霊夢以外まだ馴染めていないというのに…。

さあ、誰に声をかけようか。

1 咲夜さん + レミリア

2 妖夢 + チルノ

3 魔理沙 + 霊夢

4 優曇華 + 一輪。

5 早苗さん。

んー…。やっぱり人間が居る方が話やすいよな…。よし、咲夜さん達に声をかけるか。アリスと一緒に

「あの、咲夜さん。」

「はい、なんでしょうか。」

「紅魔館って何処にあるんですか？」

「んー、口で説明するより一度来てみる？」

「お嬢様、よろしいのですか？」

「うん、だって…面白そうじゃない!。」

「行つていいんですか？」

「いいですよ、お嬢様の意思なので。あ、それと敬語は外してく

れということですよ。」

「あ、ごめんごめん。つい癖で…。」

おー、早くもこの幻想郷で行ける範囲が増えた！。今まで森とここしか来たことなかったからな！。

これは嬉しい限りだ。

「咲夜、私も行っていいかしら？」

「アリスも来なさい。その方が楽しいわ。」

「わかったわ。」

おお！。アリスも来てくれるのか。心強い！。あ、そういえばアリスが居なきゃ道わからんもんな。当然と言えば当然か。

何はともあれ、紅魔館に行くのは明日つばい。早速予定ができた。

しかし、この幻想郷って男はいるのか？。それが疑わしくなってきた。

それはそれでいいんだけども…。

その後も宴会は続き…物凄く盛り上がった。咲夜さん達以外の絡みはまたの機会に。

第四幕「個性豊かな幻想郷」(後書き)

ども、黒猫ひろきです。

なんか、キャラがはっちゃけた回ですね…。

咲夜さんって、はっちゃけたら少し変態になりそうです。
そんなイメージがある。

そういえば現時点で 鈴木 臨を名前で 臨と

呼ぶのはレミリアだけです。

自分的にはレミイって呼びたいけど

作中ではレミリアです。一部の人以上は

ただ…東方知らない人に優しくないかもしれませんね。
キャラ紹介がちょっとあれです。

まあ、知っている人が主に読むんでしょうけどね笑

たくさんの方が読んでくれることを願ってます

そしたら僕のテンションとやる気ゲージが上がり

僕の成績も、部活での積極性も

更新率もあがり() ()

と思いたいですね!!。

こんなあとがきで大丈夫か？

と言われそうです。

面白いですかねー、こんなあとがき。

あのですね、あとがきを書くのはですね。
なんというかですね。

イツマイポリシー（棒
なわけですよ。

長くても読んでくれると幸いです。

まあ、小説と同様

自己満足な感じがするんですけどねw

自己満上等だああああああああああ

—————

本編を読んでくれた人、

ここまで読んでくれた人、

1話から読んでくれてる人

感想書こうと思いついた人

少しチラみでもしてくれた人

ありがとうございました！！

第五幕「レッツティーチ！ 其の壱」

第五幕「レッツティーチ！ 其の壱。」

紅魔館の門前に居るのだけれど…。

今、おかしな事態に直面している。

なんと…チャイナ服を着た女の子が門の前で寝ているのだ。

アリスさんによると門番らしい。

となると…サボリということになる。門番がさぼり…。不用心だ。セムしてますか？ と言いたくなる。

「それにしても不用心だなー。」

「そうねー…。」

「どうする？ 起こす？」

「いえ、もうこのままお邪魔しましょう。」

「賛成。」

寝ている門番を起こす意味はそもそも無いのだ。僕達はここの主に招待されたのだから。

紅魔館の門を抜け、中に入ると咲夜さんが居た。

なぜか鼻血を出している。

「紅魔館へようこそ。」

鼻血を出したままぺこりと頭を下げてあいさつする。

なんだか、この人がよく分からなくなってきた。

「それでは、ご案内いたしますわ。」
「はい。」

僕とアリス苦笑い。そりゃそうだろう。というか当たり前だ。

「ここがいつもレミリアお嬢様が過ごしておられるお部屋です。」
部屋はとても広くて綺麗。

家具の配置、壁の色や床なにを取っても綺麗だった。

そして奥にはレミリアがいる。

「ようこそ、紅魔館へ。適当に座っちゃっていいからね、臨。」

「あ、はい！」

僕は目の前のイスに浅く腰をかけ、アリスも隣に腰を下ろす。

「ところで臨、外の世界の事詳しく教えてよ！。学校とか、どんななのっ!？」

「学校かあ。ただひたすらに勉強をするところ。というのがまあ、イメージなんですしょうけれど。」

「うん、違うの?。」

「はい。他にも部活動というのがあってですね、好きなことを放課後に学校のみなどと一緒にやれるんですよ。」

「なんか楽しそうねっ。」

「まあ、結構キツイけどね。」

「臨はどんな部活動をしていたの?。」

「それ私も聞きたいわ。」

「僕は…何も入ってませんでした。」

そう、僕は部活動に参加出来なかった。

理由はある。人形職人の仕事があったからだ。

ただひたすらに僕は放課後人形を作り続けた。本当は部活動をしたかった。皆と一緒に青春とやらを桜花してやりたかった。

「そうなの。」

「うん。」

「…ちよつと、お茶入れてきますね。」

咲夜さんが席を立つ。

「まあ、でも。僕は人形を作るのが好きだったから、いいんだけどね。」

「そうかそうか。」

レミリアはこくこくと首を縦に振っている。
拳動が可愛い。

「鈴木さん。」

「ん、何？ アリス。」

「あ、いや…。」

アリスは話しかけておいて言葉を濁らす。

あ、いや。ちよつときつい言い方だった。

訂正しておこう。

アリスは喉元まで出かかった言葉を飲み込んだ。

「幻想郷で学校を開いてみたらどうかしら？。っと思って…。」

「僕が!?!。」

「ええ。」

余りに突拍子もない発言だ。

幻想郷に学校ねえ…。そういえば無いのか。まあ、妖怪に教養が必要かと問われればたぶんそこまで必要ではないだろうしな。

「アリス…それいいね!。」

レミリアは顔から笑みをこぼし、アリスの方を指さす。

僕は一人あつげにとられている。

「学校ですか…。私は賛成ですよ。」

咲夜さんがお茶を持って戻って来た。

紅茶だ、普通の。

「…普通の紅茶ね。」

「珍しい紅茶です。」

まあ、いいや。という感じでレミリアは紅茶を飲む。僕も気を落ち着けるために目の前に指しだされた普通の紅茶を飲む。

「で、何を教えればいいの。」

「外の世界の事を教えてくれればいいの。」

「え、それだけでいいの?」

「ええ。幻想郷の住民は外の世界の事に興味があるからね。きっと為になるでしょう。」

「私もそう思うわ。」

くそおレミリアがワクワクしてるぜ。こりゃあ絶対やらされるな。

まあ、この世界にはさほどやるのがなさそうだからいいけど。

まさか学校をすることになるとはな。

人形職人が、学校か…。なんかおかしいな。

「問題は…。」

「場所つすね。」

「お、臨乗り気じゃない。」

「え? まあ、はい。」

「それでいいのよ!!。」

「んー、霊夢とこでやる?」

「そうねー。あそこは敷地も広いし分かりやすいし。妖怪ならすぐこれるでしょうし、いいんじゃない? 霊夢に対しては許可なんていらないし。」

え、そんなんでいいの!? 霊夢さんカワイソス。(笑) がつきそうだな。

「よし、そういうことで。明日から学校怪しってことでいいね?」

「うん、いいよ。」

レミリアは本当に楽しそうな顔をしているなあ。それを見ている咲夜さんは…言わないでおこう。あの人のイメージをこれ以上崩すわけには…!。

「臨、今日は本当にゆっくりしていきなさいね。泊まって行って

くれてもいいのよ。」

「あ、いえ。お泊りまでは…。」

僕は微笑で返す。

「そうね、アリスがいるもんねー。うー。」

そう、僕にはアリスという人が居るの…！。

ああ、気持ち悪い。自分でやっといて…じゃなく、考えといてすく気持ち悪かった。

この気持ち、何処へやれば…！。

勝つてに東京湾にでも沈めてると言われそうなのでこれ以上は何も考えないさ。

東京湾、絶対ここにはないけどね。

そういう細かいことはいいじゃないか。

この話においてそれはさほど重要ではないような気がする…！。
希ガスな気がする！。的な感じです。

話が脱線してしまったので修正。

その後、紅魔館には絶えず笑い声が聞こえ皆が幸せに一時を過ごした。

明日僕は霊夢さんに殺されるかもしれないっ！。まあ、なわけないか。

あ、いや！。意外とバイオレンスな一面があるかもしれないぞ。つと、また危ない。

とりあえずここらへんでこの話は終わっておこう。紅魔館での詳しい出来事については後日話すことにする。

続きはWebでの的な何かだ。

きつとそうだ、うん。

いや、そうだ。カルピスソーダ。

第五幕「レッツティーチ！ 其の巻」（後書き）

どうも、書いた人ですっ

最近部活が忙しさんです。

妖怪いそがしさんです。

オカルトマニアとかいわないでくださいーっ

怖い話は苦手です。orz

妖怪は好きです どないなん。

ここから先は楽しい妖怪図鑑ということ。

マイナーなものから。

妖怪すねこすり

夜道歩いていると股に体をこすりつけてくる妖怪。

証言の多かった見た目はねこと犬の中間地点らしい。

まあ、かわいらしいが妖怪は見た目などコロコロ変わるので。

実際に遭う時にその可愛らしい姿かは分からない。

害は無い、強いて言えばこけそうになるくらいである。
親しみを感じやすい妖怪ではあるが、マイナーです。

第六幕「レッツティーチ・・・その貳」

第六幕「レッツティーチ・・・その貳」

今僕が置かれている状況…。

そうそれは、馬鹿に包囲されているのだ。

妖怪は頭が弱いと聞いていたが、まさかこういう事だとは思わなかった。

頭を叩くと退治出来るとかそういうものだと思っていたのに…。

馬鹿という意味だったとは…。

僕は先日言われた通り教室というものを開いてみた。今は博霊神社でやっているが、そのうち霊夢が起こりだす可能性は無きにしも非ず。

「せんせー、そもそも歴史ってなんなのー?。」

「歴史というのは、一日一日積み重ねられた過去の事。って、それを理解せずに今まで君は何を聞いてたんだ…。」

「そーなのかー。」

くそう、ルーミアとかいう妖怪…馬鹿すぎるし会話にならない。

よし、路線変更だ。

妖怪に纏わる事についての授業なら皆理解できるだろう。

「じゃあ、話を変えるぞ。妖怪についての授業をする。」

「妖怪は詳しいわよ、あたい。」

「貴方は妖精だけだね、チルノ。」

「でも詳しいもん!。」

「じゃあ、知っている妖怪について何か話して見て。」

「じゃあ…レミリア、つまり吸血鬼に憑いて話すわよ!。」

「どうぞ。」

ちゃんと話せるのだろうか。

チルノは、さつき算数の授業で時計の針の問題を出したところ何やら目を回してしまったくらいなのだ。おそらく、時計の針が回っているところを思い浮かべたのだろうか。

「人の血を吸う!。」

「…え?。」

「ん?。」

「それだけ?。」

「うん、それだけ!。」

「そーなのか!。」

まあ、合ってはいるのだけれど…。
期待して損した気分だ。

「まあ、いいでしょう。」

いいのか?。まあ、いいのか。

「ところで鈴木さん、貴方は妖怪の話が出来るの?。」

「もちろん出来るよ、アリス。出来なければ授業なんてしないさ。」

「そーなのかー。」

「それじゃあ、臨の妖怪小話まで3・2・1・?。」

魔理沙の悪意のあるカウントダウンで僕の話を始めなきゃいけないのか。

まあ、いいだろう。

「では、べとべとさんって妖怪は知ってるかい?。」

「知ってるぜ。」

「しってるよー。」

「あ、あたかももちろん知ってる!。」

最後のは絶対知らないな。

「そのべとべとさんについての小話だ…。昔、夜道を一人の女性が歩いていたら。もう当たりは大分暗く、電灯も消えかかっている。女性の家まではまだ遠く、女性は恐怖に身を震わせながら帰ったそう。そんな女性の背後から何やら足音が聞こえる。それに気付いた女性は、恐る恐る後ろを振り返ってみた。するとそこには、ポールに手足と口をつけたようなそれが居た。そしてその正体を知っていた女性は、『べとべとさん、お通りなさい。』と言って道を譲った。すると、それは消えた。」

言い切った。この長台詞…!。

「つてわけだ。」

「へー、私はべとべとさんなんて知らなかったけれど。なんかストーカーみたいね。」

「道を譲らないと食べられるんだぜ!。」

「ま、魔理沙…。それはどういう意味で?。」

「アリス、冷静に聞くことじゃないですよ。」

「ぱくつとに決まってるじゃないか、何を言っているんだアリスは。」

魔理沙は純粹だな…。色んな意味で。

アリスは、純粹なのか変なのかよくわからない所がある。

人形を作ってる時と、僕と話しているとき、魔理沙と話している時とで何やら性格が変わるような…。

「まあ、そういうわけで。来週から妖怪についての授業をするから興味があったら来てね。以上!今日は終わり。」

あー、疲れた…。わずか1時間の授業なのに…。ていうか1時間の中で何回軌道修正したんだろうか。結局、外の世界に教える授業が妖怪についての授業になったし。

まあ、外の世界についても教えるけどね。レミリアはそれを望んでいたわけだし。

「授業は終わったのかしら？」

「あ、霊夢じゃないか！。 霊夢も授業受ければよかったのに。」

「魔理沙、それはやめておいた方がいいと思うんだよ。」

「なんでだ？」

「霊夢は授業を受けるような人じゃない。」

「受ける気もない。」

「なるほどな！」

あー、なんか：かなり馴染んでしまったなあ。 まあ、新しい環境に馴染めるのはいいことなただけねど。

今ここに居ることを受け入れつつある自分が憎い…。

まあ、外の世界に戻ったところでなんだけどな。

とりあえず今はこの幻想郷におけるツツコミ役として、生きていくしかないだろう。 おそらく僕の墓場はここだ。

「そうだ、臨。」

「ん？ なんですか、目をキラキラさせて…。」

「折角神社に来たんだから…。」

「お断りします。」

「まだ何にも言っていないじゃない！」

何も言っではないが、目が語っている。

金に強欲な目だ。

「どうせお賽銭をしていきなさい。 でしょう？ お断りですよ、そんなの。」

「見破られてたか…。 くそう、いい鴨が出来たと思ったのに。」

「まあ、また来るしその時には考えておいいてもいいよ。」
「ふんっ。」

うわぁ…いじけたー。霊夢がいじけた。これは珍しいぞ、是非カメラでパシャッと収めたいね。

「じゃあ、帰りますね。」

「また明日ねー、臨。」

「また明日何なのかは聞かないでおくよー。じゃあ、皆もまた。」

そして僕とアリスは神社を後にした。
移動中はカットだ。

この話に移動中の話があると思うなよ、面倒なんだ。
メタ発言なんて言ったら負けです。

そして向かった先は人里であった。
思ったより人がたくさん居た事に驚き、風景はどこか江戸時代を彷彿とさせる。

「どう？　ここが人里よ。」

「いい所だね。人も思ったより多い。ただ、民家や人々の暮らしは今の外の世界よりかなり前のようだ。」

「まあ、幻想郷だもの。そこはしょうがないわ。それに、こごいうのも悪くはないでしょう？」

「うん、こごいうのも悪くはない。」

こんな暮らしだったら、人々は人形に興味を示してくれるだろうし。もう一回作ってみるのも悪くはないかもしれない、この世界なら。

「鈴木さん、これから私は買い出しに行くのだけれど…一緒に来る?。」

「臨でいいですよ。それと、勿論行きます。ていうか僕をここに連れてきたのは、その為でしょう?。」

「そうね、重たい荷物を持ってもらわないといけないもの。」
アリスはくすりと笑った。

そして、民家を通り抜けてすごく綺麗な並木道を通り、京都にあるような古風な橋を渡り、行きついた先は今でいうところの雑貨屋みたいなところだった。

「いらっしやいませ。」

「店長、縫い糸の白と黄色と赤と青を一括りずつと、あとは青と赤とオレンジの布を10枚ずつ…。あ、あと…例のあれ、もう届いた?。」

「ああ、届いてるよ。」

例のあれ…? どれだ。

「じゃあ、例のあれも。」

「かしこまり。」

店長が手際よく商品を袋に詰める。

そして…登場した例のあれ。

なにやら黒い布にくるまれていてとても大きい。

アリスが言った重い荷物とはこれの事か。

ていつかこれ…持てるのか？。
持つところが無いぞ。

いや…さてよ、もしかすると…。

抱える…！？。

あはは、まさか…。

「さあ、臨帰るわよ。あなたはこれを持って。」

そして指指された例のあれ。アレではない、あれだ。

「抱えるのよ、臨…！。あなたならできるわ。」

「そんなキリツとした顔で言われても…！。って重っ！。」

「あら、貴方インドア派だったかしら。」

「そりゃあもう根っからのインドア派だ。」

「あらごめんなさい。」

「笑いながら謝るのはどうかと思います。」

と言いながらも僕しか持つ人がいないので、例のあれを抱える。

予想通り安定の重さ。

だけど、持てない重さではない…！。

「あら、持てるじゃない。」

「はは…これくらいは楽勝…！。」

「全然楽勝には見えないのだけれど。」

そんなことを言いながら、僕はぶるぶるしながら店を出て、魔法の森を目指すのだった。

僕の奮闘は残念ながらここには書かない。あれは悲惨な戦いだった

…。

だがしかし…！。

僕達の戦いはこれからだ！。

みたいな感じで閉めたら作品終わるじゃないか。何やっているんだ。僕は。

と、いうことで家についた僕はそのままだれ果ててぐっすり寝

てしまったのだった。

…終わらないぞ？

第六幕「レッツティーチ・・・その武」(後書き)

えっと、作者です。

とにかくルーミアの扱いが悪いですね。
不憫ですね。

そーなのかー。くらいしか言ってますね。

そして5と6に間が生じたことをわびます。
ごめんなさいorz

高校生なりに忙しくしてますのです。

さてと、夏休みですね。

きっと投稿頻度もあがったりするんでしょうか。

アリスがここにきて大分はっちゃけてます。
主人公もはっちゃけてます。

作中に出てきたべとべとさんの話、
あれはまあ作ってたって言えば作っただんですがね
似たような話はいくつかあるのですよ。

まあ、妖怪小話は結構誰が作っても

似通ってしまうのですよね。

妖怪のよき、色んな人にわかってもらいたい。

そのための戦いは続く。

そう、俺達の戦いこれからだ！。

黒猫先生の次回作にご期待ください（）

終わりませんけどね。

このネタ、つかってみたか（）（）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3183t/>

人間と人形と幻想郷

2011年10月8日22時42分発行